

『福音の恵み』 ヨハネの福音書 1 章 43~51 節

1. 福音の広まり

43 節には「**その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされた。そして、ピリポを見つけて、「わたしに従って来なさい」と言われた。**」とあります。イエス様がユダヤからガリラヤへと移動したことがここに語られています。

ここには、イエス様がピリポに会って「**わたしに従って来なさい**」と声をかけ、彼が弟子となったことが語られています。44 節には「**彼はベツサイダの人で、アンデレやペテロと同じ町の出身であった。**」とあります。アンデレとペテロの兄弟も、このピリポも、ベツサイダ出身だったと言われています。

イエス様が「**わたしに従って来なさい**」と声をかけただけでピリポが弟子になったことが語られています。キリスト者になるとは、イエス様が会って下さり、「**わたしに従って来なさい**」と招いて下さり、それによって私たちがイエス様に従う者となる、ということです。そのことはイエス様の「**わたしに従って来なさい**」という語りかけによってこそ起るのです。また私たちの側の事情によってイエス様の召しが妨げられてしまうこともないのです。

45 節には「**ピリポはナタナエルを見つけて言った。「私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。」**」とあります。弟子となったピリポが、ナタナエルという人と出会い、語りかけ、その結果ナタナエルがイエス様の弟子となったことが、語られています。アンデレが自分の兄弟ペテロに会って語りかけ、その結果ペテロがイエス様の弟子となったことが語られていました。イエス様の弟子、キリスト者となった人が、自分の出会った人にイエス様のことを証しし、それによってその人もイエス様の弟子、キリスト者となった、という出来事が繰り返し語られているのです。これらのことによって、イエス様を信じる信仰がどのように広まっていくのかを語っています。つまり、イエス様を信じる者一人ひとりが伝道をして行くということです。イエス様に従う弟子、キリスト者となった者は、自分の出会う人たちに、イエス様のことを証しし、その人もイエス様を信じるようになるためのきっかけとなることを求められているのです。その模範がこのピリポなのです。

ピリポは知り合いのナタナエルに会って、「**私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。**」と語りました。昔旧約聖書のことを「モーセと預言者たち」と言いました。「**モーセ**」とはモーセ五書を指します。「**預言者**」とは、歴史書と預言書を指します。ですから、ピリポがナタナエルに言ったことは、要するに旧約聖書全体が書き記している約束の人物に会った、それがナザレのイエスだということでした。つまり、ピリポは「神が約束して下さっていた救い主に会った」と語ったのです。

ここでピリポが「**私たちは**」と言っていることに注目したいと思います。ピリポがナタナエルに語っているのだから、「私は」の方が相応しいのに、「**私たちは**」と言っているのです。そのことは 41 節でアンデレがペテロに会って「**私たちはメシア(訳すと、キリスト)に会った**」語った言葉も同じでした。この「**私たちは**」が意味しているのは、救い主イエス・キリストに会ったという証しは、キリスト者個人の体験であると共に、イエス様を信じる人々の群れ全体の、つまり教会の体験であるということです。

信仰に入った経路は人によって違いますが、あることが共通しています。それはイエス様という聖書に書かれていた方を信じたという共通点です。どんなきっかけどんな動機からイエス様を信じるようになってもかまいません。私たちはすべての人に共通する聖書を持っています。そしてその聖書は全体として一人の方を指し示しています。新約聖書だけでなく旧約聖書も全体として一人の方を指し示しています。その名前をヘブライ語でメシヤ、ギリシャ語でキリストと言い、油注がれた者、救い主という意味です。旧約聖書が全体として指し示しているその方がいったい誰なのか、いつ現れるのか、人々は待ち望んでいました。ピリポは感激して、「自分は今その聖書全体が指し示している方に会った。**ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。**」と証したのです。

2. ナザレから何か良いものが出来る？

ピリポは、自分の出会った「救い主」は、「**ナザレの人が、ヨセフの子イエスです。**」と語りました。ナザレはガリラヤの町です。イエス様はそこで育ったので、「**ナザレの人**」と呼ばれているのです。その証しを聞いたナタナエルは46節で「**ナザレから何か良いものが出来るだろうか。**」と言いました。これはピリポの証し、伝道の言葉に対して、そんなことは信じられない、という否定的な反応です。イエス様を信じた者が、出会う人にイエス様のことを証しする時に、このような否定的な反応に直面するのです。

ところが、マタイの福音書2章23節には、「**そして、ナザレという町に行って住んだ。これは預言者たちを通して彼はナザレ人と呼ばれる」と語られたことが成就するためであった。**」と語られています。しかし、旧約聖書を見てもそのように預言されているところが見当たりませんでした。詳説聖書には、「**そしてナザレと呼ばれる町に行って住んだ。それは預言者たちによって、『彼はナザレ人〈技、分離された者の意味〉と呼ばれる』と語られたことが成就するためであった**」とあり、イザヤ書11章1節「**エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。**」と記されています。この箇所の記されていることはわかりません。

さて、「**ナザレから何か良いものが出来るだろうか。**」というナタナエルの言葉の意味は、聖書には、「**救い主**」がナザレから出るという預言は語られていない、だからナザレの人であるイエスが「**救い主**」であるはずはない、ということでしょう。イエス様を信じることができない人の中には、いろいろな偏見があることがあります。「**救い主**」はどのように現れる、ということについての聖書の知識が、ピリポの証しを信じることを妨げているのです。ガリラヤの人であるナタナエルは、ナザレという町をよく知っているのです。ナザレなど特に立派な町ではない、あのナザレから「**救い主**」が出るはずはない、と彼は思ったのではないかでしょうか。人は、知識に基づく理性的な判断によつても、また感覚的においても、イエスが「**救い主**」である、という証しを信じることはあります。私たちは、出会う人にイエス様こそ「**救い主**」だと証しをすることを求められています。しかしその証しには、このような否定的な反応が返って来るということです。私たちがしっかりイエス様を証しすれば、それによって人がイエス様を信じるようになる、というわけでは残念ながらないです。

3. 「来て、見なさい。」

それでは、証し、伝道などしてもしょうがないということか、というとそうではありません。「**ナザレから何か良いものが出来るだろうか。**」という否定的な反応が返って来る、そこからが大事なのです。この反発を受けてピリポは、ナタナエルを必死に説得しようとしました。ピリポは「**来て、見なさい。**」と言ったのです。偏見をもっている方に一番いい方法は、イエス様のもとにその人を連れていくことです。とにかく聖書にふれ、御言葉を聞き、集会に来ることを通してイエス様に出会いない限り、その人にとってイエス様は意味がない存在で終わってしまいます。

イエス様を証しする場合、人をイエス様のもとに誘ってはじめて証しになります。その場合、証しをする人自身がイエス様と出会い、その素晴らしさを味わっていなければ功を奏しません。証しする人の中に、イエス様は素晴らしい方です、という実感がなかったら、「**イエス様のところに来て、見なさい**」と誘うことができません。ですからイエス様に出会い、イエス様が自分にしてくださったことの感動を伝えることができるよう、私たちも常にイエス様と出会っている必要があります。

「**来て、見なさい。**」それは、「私と一緒にイエスのところに来て、そして自分の目で見て確かめなさい」ということです。このピリポの姿こそが伝道の模範です。ピリポはこのようにして、ナタナエルがイエス様のもとに来て、キリスト者となるためのきっかけを作ったのです。私たちも、イエス様を証しし、伝道していくために私たちのなすべきこともこのことです。人を説得してイエス様を信じる者とする、などということが求められているではありません。しかし「**来て、見なさい。**」と言って人を教会の礼拝へと誘うことは、私たちの誰にでもできることです。ピリポのこの模範に従って私たちも伝道していきたいのです。

私たちが「**来て、見なさい。**」と誘うことによって伝道するのは、それなら私たちにも出来るからではありません。

イエス様を「救い主」と信じる信仰は、本人がイエス様と出会うことによってしか起り得ないです。人からいくら勧められ、説得されても、それでイエス様を信じることは起りません。自分自身がイエス様と出会う体験をしなければ、生まれないです。だから私たちの伝道はいつでも、その人がイエス様と出会うための機会を提供することでしかないです。後はイエス様ご自身が、聖霊の働きによって御業を行って下さることを信じて、委ねるしかないのです。だから伝道は常に「**来て、見なさい。**」と言うことなのです。

39 節でイエス様は「**来なさい。そうすれば分かります。**」と語っています。このイエス様の御言葉には、「私のもとに来なさい。そうすれば私はあなたと出会う、そしてあなたは私のことを知り、信じることができるようになる」と宣言しているのです。キリスト者は、イエス様のこの宣言の通りに、イエス様のもとに来て、イエス様と出会い、信仰を与えられたのです。つまり「**来なさい。そうすれば分かります。**」というイエス様の御言葉が一人一人に実現したのです。ですからキリスト者は、今度は他の人に、「**来て、見なさい。**」と言うことができるのです。

4. 既に知っている方

ピリオドの「**来て、見なさい。**」という誘いによってナタナエルは、イエス様のもとにきました。すると 47 節には「**イエスはナタナエルが自分の方に来るのを見て、彼について言われた。「見なさい。まさにイスラエル人です。この人には偽りがありません。」**」とあります。この御言葉は、イエス様がナタナエルのことを既に知っていたことを示しています。それは、元々知り合いだったということではありません。ナタナエルはこれに対して「**どうして私をご存じなのですか。**」と驚きをもって答えています。つまりナタナエルはこの時初めてイエス様に会ったのです。しかしイエス様は、既に彼のことを知っていました。イエス様が、「**ピリオドがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見ました。**」と言ったことも、イエス様が既に彼のことを見つめていたことを示しています。イエス様との出会いにおいて私たちはこういうことを体験します。「**来て、見なさい。**」という誘いを受けて、自分の意志でイエス様のところに来たのだと思っていたけれども、実はその前からイエス様が自分を知っていて下さり、見つめていて下さり、招いて下さっていたことを知らされるのです。ナタナエルはこの方は、自分の心の奥までも見通すことができる人だ、そう考えたのではないかと思われます。神は、自分のすべてを見通すことができる方です。遠くを見通す目をもっているということが、イエス様が神の子であることの証拠だと考えたと思います。こうしてナタナエルにイエス様を信じる信仰が与えされました。でも誰も見ていない所で隠れたところで行ったすべてを遠くから見通す力は人間にはありません。ナタナエルには、イエス様の不思議な力によってイエス様を信じる信仰が与えされました。自分がイエス様に見られている、主が自分を見ておられる、ということに気がついたのです。しかもイエス様は、ここでナタナエルのことを「**まさにイスラエル人です。この人には偽りがありません。**」と言いました。意味は、「神が選び、ご自分の民として召しておられる人」ということです。つまりイエス様はナタナエルがイエス様の弟子となり、キリスト者として生きていくことを予告しているのです。言い替えれば、ナタナエルは、自分自身もこの時まだ知らなかった本当の自分、イエス様に招かれ、従い、共に歩むキリスト者としての、つまりまことのイスラエル人、まことの神の民である自分の姿を示されたのです。

ナタナエルは、このように自分を既に知っておられ、見つめ、招いて下さっていたイエス様と出会って、49 節で「**先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。**」と言いました。イエス様こそ「**神の子**」であり、「**イスラエルの王**」であるという信仰の告白をしたのです。大事なことは、彼がこのように信仰を言い表したのでまことのイスラエル人になったのではない、ということです。イエス様が、「**まさにイスラエル人です。この人には偽りがありません。**」と宣言して下さったことが先なのです。つまりイエス様による選び、召し、招きが先ずあって、その中で私たちの信仰の告白が与えられるのです。そのようにして私たちは、イエス様を信じる者となり、まことの神の民であり新しいイスラエルである教会に加えられるのです。

5. 恵みの素晴らしさ

ナタナエルがこの時この信仰の告白をしたのは、一度も会ったことのないイエス様が自分自身を知っていて、「**ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいる**」ことをお見通しだったことに驚いたからでした。その彼にイエス様は、50 節で「**あなたがいちじくの木の下にいるのを見た、とわたしが言ったから信じるのですか。それよりも大きなことを、あなたは見ることになります。**」と言いました。イエス様と出会い、信じる者となる時に、私たちはそれなりに大きな体験をします。イエス様が既に自分自身を知っていて、見つめて、招いて下さっていたことに驚き、この方こそ「**神の子**」、「**救い主**」と信じるのです。信仰を与えられた時の、イエス様との出会いの体験は私たちにとって印象深い大きなことですが、しかし、教会に連なる者となり、礼拝において御言葉を聞き、イエス様と共に生きていく中で私たちは、それよりもはるかに素晴らしいことを体験していくのです。イエス様による救いの恵みが、キリスト者となった最初の頃には思っていなかったほどに大きく、深く、広いものであることが分かっていくのです。それは、自分の罪が、始めに感じていたよりもはるかに深く大きいことに気づかされて行きます。

ローマ書 5 章 20~21 節に「**律法が入って来たのは、違反が増し加わるためでした。しかし、罪の増し加わるところに、恵みも満ちあふれました。それは、罪が死によって支配したように、恵みもまた義によって支配して、私たちの主イエス・キリストにより永遠のいのちに導くためなのです。**」とあります。恵みの素晴らしさが分かっていくにつれ、罪の大きさも見えて来て、それによって救いの恵みの素晴らしさがさらに示され、喜びと感謝が深まっていくのです。

もっと素晴らしいことをあなたは見ることになる。それをイエス様は「**まことに、まことに、あなたがたに言います。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたは見ることになります。**」と言っています。その箇所の下の別注を見ると創世記 28 章 12 節とあります。そこには「**すると彼は夢を見た。見よ、一つのはしごが地に立てられていた。その上の端は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた。**」とあります。つまりヤコブの見た夢の話がその土台となっています。このときのヤコブは、兄エサウの長子としての権利を騙し取って、兄から逃げているところでした。ずるいことをした代償としての逃亡生活です。ヤコブは不安に満ちた寄る辺ない旅の途上で彼は、天と地との間にかかる階段を御使いたちが昇り降りするという夢を見たのです。それは天と地、神と人間とをつなぐ階段です。目覚めたヤコブは「**この場所は、なんと恐れ多いところだろう。ここは神の家にほかならない。ここは天の門だ。**」(28:17) と言いました。ヤコブはこの時に神が本当におり、自分を祝福してくれる方であることを知りました。それまでは父イサクが信じる神でした。それが今、自分が信じる神となったのです。漠然と信じていた神を、個人的に知ったからです。イエス様を信じる者が、その信仰の旅路の中で見ることになるのは、天が開け、神の御使いたちが「**人の子**」の上に昇り降りすることです。

「**人の子**」とはイエス様です。イエス様こそ、天の門であり、天と地、神と人間をつなぐ階段であることを私たちは見ることができます。イエス様は、ひとり子である神が天から降って人間となった方です。そして十字架にかかる死んで下さることによって私たちの罪の赦しを成し遂げ、復活して天に昇ったことによって私たちにも復活の命、永遠の命を約束して下さいました。イエス様において、神が人となって私たちを救って下さることと、その救いにあづかった私たちが**神の子とされ、天の父のもとで永遠の命を与える**ことが実現するのです。私たちがイエス様のもとに来て、そこで見るのは、このイエス様による偉大な救いの御業です。私たちが天国へ行くためには、このイエス・キリストという道を通っていかなければならないのです。このお方以外に救いの道は無いからです。それゆえに私たちは、あなたもイエス様のもとに来て、その救いの御業を見なさい、と人々に語りかけていくことができるのです。

詩篇 96 篇 1~4 節に「**新しい歌を【主】に歌え。全地よ【主】に歌え。【主】に歌え。御名をほめたたえよ。日から日へと御救いの良い知らせを告げよ。主の栄光を国々の間で語り告げよ。その奇しいみわざをあらゆる民の間で。まことに【主】は大いなる方大いに賛美される方。すべての神々にまさって恐れられる方だ。**」とあります。イエス様を信じた私たちは、国籍を天にもっています。私たちは地上ではヤコブのような寄留者として生きています。さらに地上の生涯を終えて主のもとに行つた時に、もっと素晴らしい主の栄光を見るように招かれています。主の栄光を見るという素晴らしい体験が私たちを待っていると御言葉が私たちに教えてくれます。